マイケル・リンド著、中野剛志解説、施光恒監訳、 寺下滝郎訳『新しい階級闘争: 大都市エリートから 民主主義を守る』(東洋経済新報社、二〇二二年、 二九一頁): MichaelLind, The New Class War: Saving Democracyfrom theMetropolitanElite, London: Atlantic Books, 2020.

小野,藍

九州大学大学院地球社会統合科学府: 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/6777125

出版情報:政治研究. 70, pp.195-202, 2023-03-31. Institute for Political Science, Kyushu

University バージョン: 権利関係:

書評

民主主義を守る――』 下滝郎訳『新しい階級闘争――大都市エリートからマイケル・リンド著、中野剛志解説、施光恒監訳、寺

(東洋経済新報社、二〇二二年、二九一頁

Michael Lind, The New Class War: Saving Democracy from the Metropolitan Elite, London: Atlantic Books, 2020.

小 野 藍

はじめに

が、教科書的な一つの回答は、君主や貴族などではなく、人が、教科書的な一つの回答は、君主や貴族などではなく、人主主義諸国の社会を表す文章として言い得て妙である。近主主義諸国の社会を表す文章として言い得て妙である。近年主義諸国の社会を表す文章として言い得て妙である。近年主義とは何か」と改めて問えば様々な論じ方が可能である。近年、民主主義の危機を嘆く論考は、枚挙にいとまがない。「民年、民主主義の危機を嘆く論考している。」

民が権力を所有し行使する政治学者だと言える。 と言えるであるならば、民主主義は少数の権力者に 冒頭の一節が現実であるならば、民主主義は少数の権力者に と言えるのかもしれない。本書は、民主 を、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を だ、シンクタンクでアメリカの政策について分析や提言を が関策であると言えるだろう。

二 本書の概要

していることが述べられる。著者によれば、欧米諸国は、

ション、本論全九章、エピローグからなる。まず、本書の議論を見ていきたい。本書は、イントロダク

一章

「新しい階級闘争」では、本書のタイトルでもある

労働者階級は数では勝っているものの、昔からその国で働い 階級の流動性は著しく低く、エリート階級はほぼ世襲である。 非営利部門のほぼ全てが支配されている。そして、欧米では ということである。 労働者階級との対立である。新しい階級対立の場は、 階級闘争」とは、大都市で働く高学歴の管理者(経営者) てきた人々と新しくやってきた移民とが仕事や公共サービ 経済、文化の三つの領域に及ぶ。上流階級の特徴は、 た人々と新しくやってきた移民との二つに分裂した大多数の リートからなる少数の上流階級と、昔からその国で働いてき ト階級が漁夫の利を得ているのである にしかすぎないが、その人々によって政府、企業、メディア、 「新しい階級闘争」がいかなるものかが説明される。「新しい 地位を奪い合うことによって分断しているため、 欧米の大学の学位取得者は、 国民の三割 エリー 高学歴 政治、 エ

> には、 地位と承認などを巡って競争している。 育った人々と、労働者階級の移民は、賃金、 て個人的に利益を得る一方で、労働者階級の国内で生まれ 移民政策を巡る対立である。 観などを巡って、階級対立を表している。 暮らしている。地理的分断は、環境政策、 数のワーキングプアの移民が暮らす。 とに分断されている。 ハブの間の人口密度の低い郊外や地方である「ハートランド」 口密度の高い大都市である「ハブ」と、ハブの周辺やハブと 国内で生まれ育った白人が大半を占める労働者階級が ハブには、エリート階級や、圧倒的多 エリート階級が移民政策によっ 一方で、 貿易、 特に重要なの 公共財、 ハートランド 移民、 文化の

政党、 この闘争は、 渉力を高め、 織によって、 の妥協によって終結した。 わゆる「古い階級闘争」は、資本家と労働者との対立である。 い階級闘争」がどのように終結したのかを検討している。 争」を終わらせる手がかりを得るため、二十世紀に起きた「古 議会、 「拮抗力(countervailing power)」を持つことが 政治、 労働組合、 アメリカのニューディール政策のような階 経済、 宗教団体、 戦後、 文化の三つの領域全てにおいて交 労働者階級は、 市民団体などの主要な組 大衆参加型 級間

戦場」では、新しい階級闘争が地理的な分断としても顕在化

二章「『ハブ』と『ハートランド』――新しい階級闘争の

第三章「世界大戦とニューディール」では、「新しい階級闘

主義こそ混乱の現世に対する解決策であると導き出す。階級に権力を分けることをエリート階級に強いる民主的多元を表(democratic pluralism)」と呼ぶ。著者は、労働者と、政府が相互調整していくような政治システムを「民主的できた。権力を分散させ、多様な中間団体が市民の声を代表

民主的国民国家と労働者階級は弱体化した。文化の領域で グローバルな租税・規制・労働力のアービトラージによって、 ラート新自由主義は、 派の文化的リベラリズムのハイブリッドである。 こうして労働者階級は 経済の領域では、国内の規制緩和や労働組合の組織率の低下、 支配という特徴を持ち、大衆参加型政党や議会は力を失った。 主義は、 入って欧米民主主義諸国における民主的多元主義が、 組織する財団や非営利団体、大学などの影響力が増している。 ト階級が推進するテクノクラート新自由主義によって打倒さ 第四章「上からのネオリベラル革命」では、二十一世紀に 宗教団体や市民団体などの組織は衰退しエリー 労働者階級の発言力が奪われる過程が描かれる。 リバタリアン右派の自由市場経済リベラリズムと左 政治の領域では、 政治、 経済、 文化の全ての領域で、 非政治的、 テクノク 反多数派 新自由 エリー 階

第五章「ポピュリスト――下からの反革命」では、欧米を

発言権や代表権を奪われてしまった。

級が、 は、 襲うポピュリズムの波が、半世紀に渡って行われてきたエ ない」(一四六頁)。ポピュリズムは、本質的に反動的なもの る形でポピュリストが現れたのだ。しかし、「ポピュリズム 階級に長年無視されてきた労働者階級の利益や要望を代弁す んだエリート階級のための政党となったのである。エリート あった政党が、人種的・民族的マイノリティや移民と手を結 が変化したことである。 紀半ばから二十一世紀初頭にかけて中道左派政党の階級構成 米のポピュリズムの台頭に関する最も重要な要因は、二十世 というかたち」(一二三頁)をとっている。著者によれば、 リズムは、どれも「大学教育を受けていない多数の労働者階 命 リート階級による「上からの革命」に抗する 病んだ政体 であることが論じられる。 管理者(経営者)や専門技術者のエリートに反抗する (body politic) つまり、 過去七十年間、 の症状であって、治療法では 国内の労働者階級の味 「下からの 欧米のポピュ 方で

なく多くの有権者の不満や主張を軽視していることが指摘さ識することによって、自らの「上からの革命」を省みること営者)エリートがポピュリズムを陰謀論や非合理な運動と認営を悪者扱いする管理者エリートの手口」では、管理者(経第六章「ロシアの操り人形とナチス――ポピュリスト有権

であり、

建設的な構想を持ち合わせてはいないからだ。

リズム、そしてテクノクラート新自由主義、 らが誤った見方であることを指摘するものの、 ソナリティ」によるものとみなす向きもある。 内のデマゴーグは、白人労働者階級が抱える「権威主義的パー て欧米の世論を巧みに操作し、ポピュリズム運動を惹起して ある。また、ロシア政府がメディアやネット広告などを通し スやソビエトのような全体主義の復活とみる見方が一般的で れている。エリートの間では、 いるのだ、といった陰謀論を唱える者もいる。 ポピュリズムの台頭は、 そのどちらも民 著者は、これ あるいは、 煽動的ポピュ ナチ 国

主主義を堕落させるものとして退ける

では、 者が普通の賃金労働者であることを何か恥ずべき時代遅れで 働者以外の何者かになれるチャンスを提供することで、 付や減税といった所得再分配の拡大、労働者階級の起業支援 機会の拡大、リカレント教育、 喝破されている。 あるかのように感じさせようとしている点だ」(二〇一一二 のポピュリストが起こす反乱に対処するために、 反独占主義が立ち並ぶ。これらが悪手なのは、 行う対症療法によって「労働者階級の安楽死」を招くことが 第七章「労働者のいない楽園-、エリート階級がポピュリズムや社会の不公正に対して 新自由主義者が処方する万能薬は、 地理的移動に始まり、 ――姑息な新自由主義的改革 「労働者階級 労働者が労 現金給 教育の 労働

参加型の組織がなければ、姑息な改革によって人間の顔をしい要なのは、「拮抗力」である。「管理者(経営者)エリート必要なのは、「拮抗力」である。「管理者(経営者)エリート必要なのは、「拮抗力」である。「管理者(経営者)エリートの不正をチェックする団結力を一般市民に与えることのできる、旧来の草の根政党や労働組合や宗教団体に西敵する大衆の不可能をしているのだ。多様性に満ちた大多数の労働者階級の安楽死」(二頁)。つまり、エリート階級は、「労働者階級の安楽死」(二頁)。つまり、エリート階級は、「労働者階級の安楽死」

た寡頭支配を生み出すのが関の山である」(二〇四頁)

第八章 「拮抗力——

-新しい民主的多元主義に向けて」では、

とで、 ての領域における政策決定過程に、全ての階級を組み込むこ すく阻止するのも容易である。 リート支配による中央集権制度に比べれば、 著者いわく、 を活かすため、中間団体 政治において影響力を持つためには、自らの強みである「数_ 員会などで意見を代表することが可能となる。 使三者からなる経済団体や、多様な利害関係者による文化委 だと主張されている。 団体を再生し、新しい民主的多元主義を実現することが必要 労働者階級の利益などを反映させる「拮抗力」を携えた中間 テクノクラート新自由主義という「病気」の原因療法として 人々の孤立感や無力感を軽減することができる。 中間団体は、 一般市民は、投票だけではなく、 (労働組合など) に頼るしかない。 腐敗と無縁ではないが、 また、 政治 経済 汚職は露見しや 労働者階級が ・文化の全 少数のエ 政労

三 本書の意義

固定した構成員を有する政治共同体の固定した境界線の内側を改め、国際的な資本の移動や貿易政策、移民政策を調整し、医主的多元主義の再構築のためには、現在の新自由主義的政策を改め、国際的な資本の移動や貿易政策、移民政策を調整し、なら、民主的多元主義では、対外主権が不可欠である。「なぜる。民主的多元主義では、対外主権が不可欠である。「なぜる。民主的多元主義では、対外主権が不可欠である。「なぜる。民主的多元主義の本質の対策を調整し、

グローバル経済はそれぞれの国の国民経済に奉仕すべきであというに、国民の連帯、そして労使交渉における国内労働者と合法移民の交渉力に配慮した戦略的貿易政策と選択的移民政策を採用すべきである」(二二九頁)。留意すべきは、貿民政策を採用すべきである」(二二九頁)。留意すべきは、貿民政策を採用すべきである」(二二九頁)。留意すべきは、貿別や移民を否定するわけではないということである。「国民経済は国内の多数派である労働者階級に奉仕すべきであり、公司というにより、国家は、資産の対象の対象があり、の対象の対象の対象を表している。

バルな統合を優先するのではなく、国内の階級闘争の終結やでしか行うことができないからである」(二二六頁)。グロー

本稿では、少し別の角度から更なる意義を二点挙げた

端的に示すものであるといって過言ではない。本書の議論は、広範かつ明晰で大いに示唆に富む。本書の産としてのポピュリズムの政治を見つめる新たな視角をとしてのポピュリズムの政治を見つめる新たな視角をとしてのポピュリズムの政治を見つめる新たな視角をといって過言ではない。本書の議論は、広範かつ明晰で大いに示唆に富む。本書の

ている。社会的流動性がない国家では、このような現状は大の企てを論じている点である。「新しい階級闘争」におけるとは、上流階級に属する資格を買うためのマーケット(市場)であると考えることができる」(四七頁)。しかし、その市場の入場券の入手は、裕福な家庭に生まれるかどうかにかかっの入場券の入手は、裕福な家庭に生まれるかどうかにかかっの入場券の入手は、裕福な家庭に生まれるかどうかにかかっの入場券の入手は、裕福な家庭に生まれるかどうかにかかっている。社会的流動性がない国家では、このような現状は大いる。社会的流動性がない国家では、このような現状は大いる。社会的流動性がない国家では、このような現状は大いる。社会的流動性がない国家では、このような現状は大いる。

ものが成功を手にできるという「能力主義(meritocracy)」書と同様の見方を取った上で、出自などによらず能力の高い政治哲学者のマイケル・サンデルも、現代社会について本

易

移民政策は調整されるべきだと著者は主張するのだ。

る」(二四六頁) ため、

民主的多元主義の実現には、

自国の貿

多数の労働者の地位を貶めることに繋がる。

労働者の貢献を見くびり、彼らの社会的な地位と評価を損ないる「責任」「努力」「意欲」などのレトリックを纏うことにいる「責任」「努力」「意欲」などのレトリックを纏うことにれているのは当人の問題かのように仕向け、不平等な社会をれているのは当人の問題かのように仕向け、不平等な社会をの理想が、エリート階級を傲慢にし、労働者階級への侮蔑をの理想が、エリート階級を傲慢にし、労働者階級への侮蔑を

うものだった⁽²⁾。

労働者確保のためには移民が必要だ、という議論は端的に 組合の弱体化、 権力を分有し、政治に参加できるようにすることなのである 階級の「拮抗力」の強化を通じて、全ての地位にいる人々が 再生し、多元的民主主義を再構築することを掲げる。 言って欺瞞である。 に見たように、 されている点である。著者は、移民の大量受け入れは、 べきだとは考えない。目指すべきは、 上流階級の不正を暴きつつも、労働者階級が最終的に勝利す 第二の意義は、移民政策について一歩踏み込んだ議論がな 本書は、労働の尊厳を回復する手立てとして、 エリート -階級である。 大量の非熟練移民によって恩恵を受けている 福祉制度の支持低下に繋がると指摘する。 「特定の職業がその国の労働者ではなく 国内労働者に人気のない職業の 国民の連帯と、 中間団体を ただし、 労働 既

> よい」(二四四一二四五頁)。具体的には、 すものとして大変意義深いものである。 される本書の移民政策の議論は、 度の導入などを提案している。 権の取得、ゲストワーカー制度の廃止、 恩恵を与えないくらいなら、低賃金労働者を入れないほうが を目標とすべきだと主張する。「低賃金労働者に福祉国家の 著者は、 がる雇用主の長年にわたる差別の結果である」(二三六頁)。 い賃金で働き、〔解雇を〕恐れて文句を言わない移民を雇いた 移民によって支配されているのは、一般的にいうと、より安 移民政策は、労働市場の分裂を最小限に抑えること 労働者階級の団結のためにな 現行の移民政策に猛省を促 不法移民への恩赦 熟練労働者の 市民

四 本書の難点

わち、 体化は目に余る。 か、という点である。特に、 主義を実現するための る。しかしながら、若干の疑問点がないわけではない。すな 洞察力を有し、日本社会に対しても有益な視座を与えてくれ これまで見てきたように、本書は様々な点において優れた 本書の主張の根幹に触れることになるが、民主的多元 しかし、 中間団 本書では労働組合をいかに強化し 著者が重要視する労働組合 体の再生は果たして可能 の な 弱

数は、 組合に関する具体的なイメージすら抱けないのが現状ではな 卒業した人々は現在五十歳前後なので、現在の若者は、 いだろうか。また、 推定組織率は、 でも労働組合の弱体化は甚だしい。二〇二二年の労働組合の ため、現実的に難しいのではないかと思わざるを得ないのだ。 ていけばよいのか、 日本を例に見てみたい。欧米民主主義諸国と違わず、 一九九四年をピークに減少傾向にある。 一六・五%で過去最低の値となった。組合員 といった議論が十分にはなされていない 労働組合を組織するノウハウの継承が困 同年に大学を 労働 日本

の多くは、賃金交渉や処遇改善など望むべくもない。 が働組合への期待値の減少などが考えられる。しかし、組織学働組合への期待値の減少などが考えられる。しかし、組織学働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 (本)、非正規社員の加入を認めない労働組合は六割に上る。 難になっていることも考えられる。

生活水準が極端に低い非正規労働者に分断していると言える較的地位が守られている正規労働者と、それに比べ所得水準、では指摘されていた。対して、日本では、労働者階級は、比人々と新しくやってきた移民との二つに分裂していると本書欧米諸国では、労働者階級は昔からその国で働いてきた

のではないだろうか。社会学者の橋本健二は、正規労働者と 非正規労働者は収入や貧困率などにおいて大きな格差があることを豊富なデータで示しつつ、労働者階級の分断の大きな要因となり、国民の連帯や団結を阻んでいる。特に日本においてとなり、国民の連帯や団結を阻んでいる。特に日本においてとなり、国民の連帯や団結を阻んでいる。特に日本においてとなり、国民の連帯や団結を阻んでいる。特に日本においては、労働組合に若年層が参画できるようにし、運動を活性化させる方策を打ち立てると同時に、安定した雇用環境を実現させる方策を打ち立てると同時に、安定した雇用環境を実現させる方策を打ち立てると同時に、安定した雇用環境を実現する政策が求められるのではないだろうか。

変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。 変革する必要もある。

かせているのである。したがって、やはり現状を変えるため力感に苛まれるだろう。そんなディストピアが未来で顔を覗になると著者は警鐘を鳴らす。もしそうなれば、多くの一般になると著者は警鐘を鳴らす。もしそうなれば、多くの一般になると著者は警鐘を鳴らす。もしそうなれば、多くの一般以上のように、労働組合の再生は困難が伴うだろう。しか以上のように、労働組合の再生は困難が伴うだろう。しか

働者の地位を向上し、階級闘争に終止符を打たねばならない。 には、むやみやたらな「上からの革命」に歯止めをかけ、 労

五 おわりに

民が話し合いながら妥協を重ねていく「庶民的な」ものなの 民主主義とは、 的な(vulgar)』ものになるであろう」(二二二頁)と述べる。 自由主義や煽動的ポピュリズムは、少しも民主主義とは言え 渉を行うことである。この定義に従えば、テクノクラート新 益と価値観を守る能力を備え、終わりのない制度化された交 要な社会集団が、それぞれ実質的な交渉力を持ち、自らの利 だ。「真の民主主義とは、政治・経済・文化における多くの主 ではないか。 たものになるであろう。すなわち、(…)最良の意味で『庶民 ない」(一四四頁)。さらに、著者は、現代の参加型運動は あると述べた。著者が考える民主主義とは、次のようなもの - 垢抜けない下町言葉の演説と市民の雄弁術とを組み合わせ 本稿の冒頭で、本書は民主主義の在り方を再考する試みで 高尚な理念というだけでなく、本来、一般市

る政治を実現する、という難題に対し、大いなる貢献を果た 本書は、階級闘争の渦中で全ての国民がインサイダーとな

> 社会の再建に繋がることを願いたい。 している。本書の議論が日本においても多くの国民に届き、 「大都市エリートから民主主義を守る」ことで、自由民主主義

- $\widehat{1}$ 能力主義は正義か?』早川書房、二〇二一年を参照のこ マイケル・サンデル /鬼澤忍訳 『実力も運のうちー
- 2 回書、 四七頁
- (3)厚生労働省「令和4年労働組合基礎調査」https://www mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/roushi/kiso/22/dl/01
- pdf(二〇二三年二月十三日閲覧

 $\widehat{4}$

総務省「令和4年労働力調査」https://www.stat.go

- (5)厚生労働省「令和3年労働組合活動等に関する実態調 jp/data/roudou/index.htm (二○二三年二月十三日閲覧
- you02-4.pdf(二〇二三年二月十三日閲覧 查」https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/18-r03gai
- (6)橋本健二『新・日本の階級社会』講談社、二〇一八年 七四一七六頁。
- (7)施光恒「グローバル化の是正で中間層の再生を」『Voice。 第五二七号、二〇二一年、六二一六九頁を参照のこと。
- (8) 施光恒 「著者に聞く 新しい階級闘争― 二〇二二年、一五一頁を参照のこと。 トから民主主義を守る」『月刊日本』第二十七巻第一号